認定医ケースプレゼンテーション抄録

フラビーガムを伴った患者に対する総義歯補綴の一症例

芝野みほ子

A Case of the Complete Denture Treatment for Patient with Flabby Gum

Shibano Mihoko

I. 症例の概要

患者：50歳，女性（昭和21年1月30日生）

初診：平成8年5月27日

下顎粘膜の疼痛および咀嚼障害を主訴として来院され，初診時には，上下無歯顎で，上下顎とも前歯部から両側第二小臼歯相当部の歯肉頬移行部に広範囲の腫瘤を認め，発赤，腫脹，熱感を呈しており，その炎症は口唇の一部まで波及していた。また，上顎前歯部には広範囲のフラビーガムが認められた（図1）。

図1 Frontal and intraoral views before treatment
初診時の下顔面と口腔内状況

II. 診断と治療方針

床形態および咬合関係の不良な義歯の長期使用によって，義歯性線維腫，フラビーガムの発生に至ったと診断した。非観血的対応による線維腫の消退と，フラビーガムの縮小化を図り，新義歯を製作することとした¹⁾。

III. 治療内容

使用していた義歯の修理および調整，抗生剤・消炎剤の投薬を繰り返し行った。それにより初診から約1カ月後に，炎症症状が軽減してきたため，治療用義歯の製作を開始した。通法どおり製作した治療用義歯の装着後，義歯性線維腫の消退を期待し，約2カ月間粘膜調整を行ったが，良い結果が得られなかったため，口腔外科に線維腫の切除と口腔前庭拡張術を依頼

した。創部の瘢痕収縮による口腔前庭の狭小化を防ぐため，治療用義歯の床縁を延長し，粘膜調整を行った。術後2週間で創面が安定してきたため，新義歯の製作を開始した。

新義歯製作の際には，フラビーガム部が印象圧によって変形・変位しないように，ダブルトレーを用いて選択的加圧印象を行った。また，咬合に関しては，プロソスケールを用いて歯槽頂に対する人工歯排列位置を決定し，中心咬合時の前歯部の無接触と偏心咬合時のバランスを図った²⁾。

IV. 経過観察と考察

平成9年4月25日に新義歯を装着し，その後定期的に経過観察を行った。1年ほど経過した時点で，咬合の調整などを行っても，上顎義歯が脱離しやすくなってきたため，軟性裏装材を用いて4～5カ月に1度リライニングを行っていた。しかし，リライニングを直接法で行っていたことによって，咬合関係にずれ

図 2 Arrangement of condyloform teeth using the Gerber articulator
ゲルバー咬合器を使用したコンデューロ
フォーム人工歯の排列

図 3 Final denture by which the lingualized occlusion is applied
舌側化咬合を応用した新義歯

が生じてきたため、新たに義歯を製作することとした。その際、矢状面で顎堤対向関係を観察すると、上下顎ともに前方部が著明に吸収している前方離開型であるため、咬合力の減少とともに咬合力を顎堤に垂直力として誘導する咬合型が必要と考え、舌側化咬合を応用して排列した³⁾ (図 2)。義歯完成後、上顎義歯はヴィスコゲルを用いて動的印象、リライニングを行った (図 3)。その後も定期的に経過観察を行っているが、患者の満足が得られ、経過良好である (図 4)。

ナソヘキサグラフにてタッピング運動時の上顎義歯の動揺を観察したところ、義歯は前歯部を中心に前上方へ動揺していることがうかがえた (図 5)。

咀嚼障害の改善を目的として、印象法および咬合様式を考慮して義歯を装着したが、上顎義歯の動揺を抑

図 4 Intraoral views after treatment
現在の口腔内状況

図 5 Observation of movement of maxillary complete denture by the Gnathohexagraph
ナソヘキサグラフによる上顎義歯の動揺の観察

えきることはできなかった。しかし、咬合力の減少とともに咬合力を顎堤に垂直力として誘導するように、舌側化咬合を応用したことによって下顎義歯の安定が得られ、その結果、上顎義歯の動きが一方向に定まり、義歯の維持が得られているのではないかと考える。

文 献

- 1) 西浦 恂, 権田悦通. 補綴的な処置を中心としたフラピーガムへの対応. 歯科ジャーナル 25: 840-844, 1987.
- 2) 野村修一, 野村章子, 石岡 靖. 高度のフラピーガムを有する無歯顎症例の補綴処置. 新潟歯学会誌 17: 47-62, 1987.
- 3) 小林義典. レデュースドオクルージョンの応用による不利な顎堤対向関係への対応. デンタルアスペクト 4: 38-48, 1990.